
スパイシー・スパイダー

幻想人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイシー・スパイダー

【NZコード】

N7150D

【作者名】

幻想人形

【あらすじ】

家に帰ってきて青年は驚いた。自分の部屋に、とても美しい少女が不法侵入していたのだから。青年は怒鳴り、少女はポヤヤーンとそれを受け流す。これは、そんな一人の愛と笑いと涙のドタバタ・ラブコメディーである。

どうしてこんな事になつたのか全く理解できない。

なんだ、このありえない状況は……。

青年は困惑していた。狭苦しい6畳ほどの部屋の中、青年はこの非現実にただただ沈黙し、目の前にいる少女を黙つてみているしかなかつた。

彼が変な目で自分を見ているのが少女には不安に思えたのか、少女は戸惑つた表情で青年を見つめていた。

そんな顔で見られても困るのだが……。

青年は自然と少女から目を逸らした。

「あの……どうして、お顔を逸らされるのですか？」

少女がゆっくりとした口調で、オズオズと青年に問いかける。

青年はその問いかけに沈黙で返す。

と、こんな平和な会話から青年の非日常は始まった。

これは、ゲームやパソコンにしか興味を示さないオタク青年と、ドジッ子少女（？）が織り成すちょっと変わった物語である……かもしない……。

第一笑へ触りぬ蜘蛛になんとやらへ

「なんだよ……。お前は

鋭い冷たい瞳で、容姿端麗な青年が何かを睨みつけ問い合わせていた。

着替え途中なのか、ワイシャツがはだけて白い肌が見えている。

ある日の事である。青年事、藤堂 聖の視線の先には一匹の蜘蛛が置の上に乗つかっていた。

「とつととびっか行け、ともなぐば瀆すぞ……」

聖は冷たくそう言い放った。

蜘蛛に声かけている辺り痛いと思つが、まあ一人暮らしだから気がふれたとでも考えて、その辺は突っ込まないで置いてもらいたい。

だが、蜘蛛は蜘蛛。聖の言つていることが理解できているはずもなく自分がいる所から動かない。

聖はイライラとし始めて、このまま踏み潰してやるつかと、足を少し浮かせた。

それでも、蜘蛛は動こつとしない。なんといつか、自分が危険という事が分かっていなこよつだ。

聖は、足を降ろそうとして……

「アホらしき……何を蜘蛛」ときでイライラしてこらのだりつ。

…… そういうえば、朝蜘蛛は殺すべからずといつしないと、思いと止まり少し考え、「トロイ奴だ……」顔をしかめてそつ吐き、やつと蜘蛛へと手を差し伸べた。

蜘蛛は何の警戒もなしに聖の手にひょいと乗つかった。蜘蛛を手に乗せたまま聖は窓まで行き蜘蛛をそつと窓の桟の所に下ろした。蜘蛛は聖の手からそろそろハ本の足を動かして本当にゆりへりした動きでのろのろと下りた。

なんだこの蜘蛛は本当にトロイ……。聖はまたいらいらし始めた。完全に聖の手から下りた蜘蛛は何故か、聖のほつを向いて、彼を見つめた…… ように見えた。

「なんだよ。やせりと出て行けよ……」

言葉が通じたのか、蜘蛛はクルリと向きをかえ、窓の外へと遅い動きで出て行つた。

蜘蛛が完全に出て行くと、聖はぴしゃりと窓を閉めた。

そうして、自分がまだきちんと着替えていないことに気が付き、開けつ放しになつていてるワイヤーシャツのボタンを閉めた。

全く、ところ蜘蛛のおかげで時間を食つた……あの蜘蛛この先絶対長生きしないぞとか、思ひながら、聖はちらつと時計を見る。

時刻は7:50を示していた。

ましい、このままでは遅刻する……。聖は慌てて、鞄に教科書を詰め、部屋を飛び出した。

階段を駆け下り、自転車置き場へと向かい、自転車に跨りぐつと足に力を入れペダルを漕ぎ出した。

このまま飛ばせば、20分位で学校に付くであらう。聖は余裕な表情を浮かべて自転車を漕いだ。

そうして、20分後……聖の計算どおり学校についつしまった。

自転車をいつも隠している路地裏に隠し、厳重に鍵をかけ聖は校門へと向った。

間に合ひて当然みたいな表情を浮かべ数多い生徒達の中にまぎれて聖は校門をくぐる。

下駄箱に靴を入れ、上履きに履き替え教室に向う。

ガラガラと扉を開け中に入る。

騒いでいる生徒達を横目に、聖は自分の席に着いた。

「おはよう」

と、目の前に一人の少女が顔を覗かせる。

桃色の短い髪の毛の端つじをヘアピンで留め、大きな団栗眼と人懐っこいそうな笑顔を浮かべた、決して美人ではないが、可愛らしいという印象を受ける女の子が目の前にいた。

聖は感情済して「ああ」と答える。

少女は、少し不満だったのか頬を膨らませる。

「わー。さてさておひつじの聖はもーいこじやなー。」

聖はつぎたんとうに、少女を見つめる……

「うわわー。どうだつてこーだら。今更にしてお前は僕にそうかかわりたがるんだ?」

少女は更に小さな顔を膨らませ、くづくづと可愛らしく瞳で聖を睨み、

「お前じやなー! 桃山^{トマヤマ} 滋つて名前があるもー。聖の馬鹿!」

少女、渚は聖の事をはじほじと呑んでいた。

その行動を、軽く受け流しだるそつに渚へとこへ。

「あ……まいはー。わかった、わかったよ。挨拶すりゃあいこんだらうへー。」

聖はまだのんびり、うつむいてあまつに笑やかじやなに低い声で……

「……おひつじ……」

と、呟いた。

「……」

その声に、渚は「……」となつた。

それと同時にチャイムが鳴り響いた。

今日もぐだらなく無駄な時間が始まるとい、聖は密かに思った。

時間は流れ、昼休みになつた。

購買で買つてきた二つペパンを取り出し、口に持つて二つとしたときだ。

「ひ~じり~」

わつとでも言ひそつた勢いで、渚が耳元で大声を張り上げた。

「だあああつ~! うるさいな! なんだよ~ 一体!~」

「わわわ~! ゴメン……。でも、聖が寂しそうにお昼食べてるから、一緒に食べよ~うと思つて……」

さすがに大声を出して悪いと思ったのか、渚の声は小さかつた。

しかし、聖は容赦なくそんな渚を責める。

「余計なお世話だ! 僕は一人がいいんだつ! 全く、お前の無神経にはほどほど困る……いくら、幼馴染だからつてもう少し遠慮つてものをおぼえろよな」

聖はこめかみを抑える。すると、渚は瞳に涙を浮かべてポツリと咳

いた。

「…………」めんねーさー…………」

聖は少し瞳を見開き、しかしすぐに冷淡な顔に戻して渚を静かに見つめた。

「…………分かつたなら、友達のとこに戻れよ…………僕の所にいても、お前を泣かせるだけだからな…………」

渚は「クソ」と頷き、涙をぬぐい先ほどの涙が嘘のように明るい花のよつな笑顔で友達のもとに戻つていった。

聖は、何故か寂しそうな瞳で……「なんだ聖、また渚ちゃんのお誘い断つたのかよ」

いきなり話しかけられて聖は、椅子から転げ落ちた。

声の主はそんな聖を不思議そうな顔で見つめた。

「うふ？ なにやつてるんだ？？」

聖は立ち上がり、溜息を吐き出し、田の前のこかに軽そうな男子を一瞥した。

そうして、ポツツ……

「…………また無神経なヤツが一人…………」

聖は疲れたよつて呟いた。

「ん？ 何か言つたか？」

「いや、別に……。それよりなんのよつだ、加賀屋」

軽そうな青年事、加賀屋 カガヤ 一誠は、ニヤリといやらしい笑顔を浮かべ席に戻つた聖にのしかかりつつ耳元で囁いた。

「全くお前も隅に置けないなあ～」

加賀屋はニヤニヤとこやらしい笑いを聖に向けた。

「はつ？ 何のことだよ」

聖はわけが分からぬといつた表情で、加賀屋の顔を手で押しのけ離れさせる。

「この高校のアイドル、容姿よし、性格良しの渚ちゃんのお弁当食べよ～」のお誘いをああも簡単に断るとは……。聖、お前も隅に置けないなあ～」

「うぬわこなあ……」

聖は、そう小さく呟き食べるのを忘れていたコッペパンを齧つた。

「加賀屋には関係ないだろ～。それに渚とはただの幼馴染だ」

聖は言い切る。加賀屋は目を大きく見開きワザとらしく驚いて見せた。

「お前……気が付いてないのか？」

聖はコップペパンを食べ終わったためか、お茶をストローですすつづつ、加賀屋に尋ねた。

「何がだよ」

「女の子が、一緒にお弁当食べようつたのは一つしかないとつづつ」

「だからなんなんだよ？」

加賀屋は、はあつと溜息を付き顔に手を当てた。今にもオーノーとか言い出しちやうだ……。

「まあ、いいや……いざれ分かるや」

加賀屋は聖の肩をぽんぽんと手の平で叩いた。

聖は最後まで「？」な顔して、首をかしげた。

わざ、放課後になつた。聖は素早く教科書を詰め込み、掃除もそこに教科書を飛び出した。

「ちよつと、聖ー。掃除はあーー！」

「そんなの、お前等がやつておけばいいだらう……。僕はやりたくないからな」

「聖い／＼！－ わよつと－－ 待ちなわ－－もつ……」

走り去り、見えなくなつた聖に、渚は溜息を吐いた。

* * *

聖は自転車に飛び乗り、意氣揚々と澧あわせを出した。彼がこんな一戸にこつてこるのは珍しかつた。

いや、むしろ気持ちが悪いこと限り無しである……

ともかく、聖は家にこもることを至福の喜びとしていた。そう、彼はいわゆるヒッキーなのだ。

家の中にこもり、パソコンをやる。適当に生活して適当に過ぐる。

おかげで「近所さん関係は最悪。会つても挨拶一つしない。まさしく人間を体現したような中身が彼の全てだった。

容姿は「に……なんて事をナレーションに思われてる」とほつて知らずに聖は家につく。

自転車置き場に自転車を置き、階段を上がり自分の部屋の前に来る。

鍵をあけようと、鞄を弄り鍵を探す……と……。

ガチャリと、何故か鍵が開いた。

「？？？」聖の頭に沢山の？が浮かぶ。

なんだ？ 何故鍵が勝手に開いたのだ？ 泥棒か？ いや…… 泥棒なら、逃げるか居留守を決め込むはず……。では、何故鍵が開いたのだ？

扉を開けるのが憚られる……。しかし、入らなければゲームもパソコンも出来ない……。

そうして、思いなおす。

（何を遠慮しているのだ。ここは僕の家ではないか……。そもそも何故得体の知れない他人に僕が遠慮などをしなければならないのだ。）

聖の脳内では恐怖より、パソコンとゲームへの愛情が勝つたようだ。素晴らしいオタク魂だ。と、ナレーションがあきれていつても聖にはどうせ伝わらない。

聖はいつものように、王様たる堂々とした態度でノブに手を掛けた。

扉を開くと一聲、

「誰だ！ 勝手に僕の部屋に入り込むやつはー！」

怒鳴った。

と、だれも居ない……。

「あれ？」

何故だれも居ない。聖がキヨロキヨロと部屋を見回す…… そして

下を見た。

何かが丸まっている。それはどうやら、正座をして頭を下げているようだ。

聖はといふと……。

「誰だお前は！」普通に怒鳴つた。もつ少し、驚いたり出来ないのであろうか……。

その人物は顔を上げずに、慎ましやかなる口調で、

「お待ちしておりました……聖様」

そう呟いた。

聖は突然自分の名前を呼ばれ、言葉を失つた。

そりや、突然知らない人物に自分名前を呼ばれたら驚くであろう。

謎の人物はゆつくりと、背景があるなら桜が舞いそうなどてもしなやかな動きで顔を上げた。

それは、とても美しい少女だつた。長い髪を一つの団子にまとめ、金色の豪華な装飾の蜘蛛の巣を象つた簪を挿しており、夕日のような紫色のこれまた蜘蛛の柄が刺繡されている高そうな布で出来た着物を着た、可憐な少女が可愛らしいほほ笑みを浮かべて聖を見つめていた。

聖は一瞬でこの少女に惹かれた。さつきまでの態度が嘘のようだ、今は大人しい。

「お待ちしておつました……聖様……」

少女の声で聖はハッと我に返った。そつして、驚きととけい、元おおあああああ……だ、誰だお前は……」

飛びのきつつ、一度外に出て、そつと扉から覗いて、指をさして叫んだ。

やつ、それが正しい反応とこつものだよ青年一

少女は、大きな声が驚いたのか、困った顔をしてまた頭を下げた。

「も、申し訳あつませんー。私つたら聖様を部屋にお通しもせず、びつわお入りくださいませ。聖様……」

おじとやかに端こみけ、二口こと聖を家の中へ定す。

「お前に言われなくとも入るー。じいさま僕の部屋だからなー。」

驚きもすぐには薄れ、聖は元の優しさのかけらを全く持つて感じさせない傲慢な態度に戻り、靴を無造作に脱ぎ捨て、すげすげと部屋に入る。

そつじて、鞄をその辺に放り投げどんと、座り込んだ。

少女は、幻覚の桜をヒラヒラ舞わせながら、聖の前に淑やかに正座した。

つけんどんに聖は少女に尋ねる。

「それで、お前誰なんだよ。僕の部屋に勝手に入り込みやがって……なんだ、ストーカーかお前は」

いくら、部屋に勝手に侵入されたからって初対面の少女をいきなりストーカー呼ばわりとは、デリカシーも何もあつたようなものではない。

少女は何かに気が付き、まあとばかりに口元に手を当てまた深々と頭を下げる。

「も、申し訳ございません！ 私ったら、ぼんやりしていて……自分の自己紹介もしていませんでした！」

聖はウザそうに少女を見つめ。せつじ口調で少女に言った。

「謝罪はいいから、早くお前が誰か説明しろ……」

「は、はい」

少女は一呼吸おき、
「私、女郎 ジョロウ 詩紅母シクモ と申します。このたびは命を助けていただいた聖様にご恩返しをしたくやつてまいりました」

少女、詩紅母は大人しい口調で言った。

「は？ 恩返し？」

聖の頭に再び？が舞う。

こんな、女を助けた覚えは自分には無い。この女は何を言っている

のだろうか？

詩紅母と聖の間にビュウッと風が吹き、そうして沈黙。

詩紅母がオズオズと聖に尋ねる。

「あ……あの……覚えていらっしゃいませんか？」

聖は即、頷く。

詩紅母にガーンと背景が桜から雷に変わった。

およよと詩紅母はしきしき泣き出した。何故か幻覚の桜をまわせて。

「ひどこでござります、聖様……」

「酷いといわれても知らないものは知らない。大体お前どうやって僕の部屋に入り込んだんだよ！ 鍵は掛けてあつたはずだぞ！」

詩紅母は何故か開いている窓を指さした。
詩紅母は泣くのをぴたりとやめやんわりと微笑み、
「それでしたら、そこから入りましたわ」

聖は示された場所を見て、ピシリと怒りマークを浮かべた。

「ふざけてんのかー！ こーはアパートとはいえ3階にあるんだぞ！ それを昇つてきたなんて信じられるかー！ 言めているのかお前は！」

詩紅母はびくっと身体を震わせ、聖を怯えた瞳で見つめて弁解する。

「だつて、本当なのですよ！ 私は、本当にそこから入つたのでござりますか！」

それが本当なら、真実はどうあれ立派な不法侵入だと思つのが……この、お惚け天然少女にそんな考え方露も考えていないようだ。

必死に説明する詩紅母に、聖はだんだん頭が痛くなつてきた。

「お前……それを僕に信じりうて言つの？」

疲れたよつた聲音で、詩紅母にやうと問ひ。

「はい！ 信じてくださいませー！」

詩紅母は強く主張する。

聖は思つた。駄目だ、この女頭がいかれないと。

しかし、詩紅母は真剣である。

聖は溜息をついた。

「ああ……分かつた……お前のいう事信じてやる……

一言やうこつと、詩紅母の表情はぱつと明るくなつた。

「本当にりますか！」

聖は、珍しく明るい笑顔を湛えて、「ああー」と答えた。

「ありがとうございますー。」

詩紅母がペーぺーことお辞儀をしてくる間に、聖は「ゴーゴー電話」と手を伸ばして……

110……とボタンを押す。

そうして、笑顔から無表情に戻し……

「もしもし、警察ですか？ 何か、変な女に不法侵入……」

詩紅母が慌てる。

「わあわあわあーーー 警察に通報しないで下せーーー。」

電話を奪い取り、誤魔化して電話を切つた。

「ひ、聖様何をするのですかー！」

「ちー……」

聖は本当に残念そうに舌打ちした。

詩紅母は眉毛を少し吊り上げ、聖に初めて怒った口調で話しかけた。

「もうーー 聖様は、私が誰だか本当にお分かりにならないのですか？」

聖はイライラしていたが、こいつに怒つても疲れるだけだと、落ち着けと自分に命じ冷静な口調で、彼女に言った。

「だから、何度も言つが……僕はお前が誰かなんて分からぬ……」

詩紅母はハアツとでつかい溜息をはいて、肩を落とし、仕方ないと
いう風に、

「分かりました……本当は元の姿に戻るの嫌なんですけど……」

今度は何をする気だ。本当にこの女は得たいが知れない。「今度は
何をする気だ……」 そう言おうとした口を『二』の字に開けよつとした
ときだつた。

ハラリ、パサツ……

何か布が床に落ちる音がした。聖は自然と音のした方へ視線を向け
た。

そこには、紫の着物が落ちていた。

ん？ これは先ほどまで詩紅母が着ていた服ではないか？ 確かに、
この蜘蛛の柄の着物は詩紅母が着ていたものだ。

では、今詩紅母はどうなつている？ 着物を脱いでしまつたのでは、
もちろん下着だけになつてゐる……そこまで考えて、聖は顔をカツ
と上氣させ、

「バ、馬鹿！ いきなり服を脱ぐヤツがあるか！！」

とつたに後ろを向いた。それと同時に困惑も、

一体本当にこいつは何なんだ！ やはり、警察に連絡するか？ 不
法侵入と猥亵容疑で……。

とか思いつつも、自然と首が後ろに。女といつものが縁がないせいか、やはり気になる身体の構造……。

しかし、理性がそれを留める。

ここからは、聖の脳内の会話である。

『ダメだ聖！ 何をしているんだい？ ここは大人しく警察に連絡して、彼女を引き取つて貰うのが今するべきことではないのかい？』

聖の理性。聖天使の弁解である。

『何馬鹿なこと言つている。ここは、保健のお勉強という事での女の観察をすることが男として正しい、今すべきことだ！』

聖の本能。聖悪魔の意見である。

『こんな奴の意見を聞いてはダメだ聖！ 君は清く正しいオタクな青年だろう！ 女の子の身体なんて、P Cの1-8禁ギャルゲーだけにして置きたまえ！』

天使なのに、発想がオタクである。ま、聖だからね。

『あんな、バーチャルを見て何が楽しい。聖、男だろう！ ちょっと振り返れば済む話だろ？』

悪魔が耳元で甘く囁く。

そうそう、振り返れば和風美人が……

『聖！ しつかりしるつ！ ダメだ！ 悪魔に唆されちやー。』

聖天使が髪を引っ張り、まわしそうな首を何とかもとの位置に戻す。

ハツ危ない危ない。

『見ちまえよ？ 減るものじやないだろ？』

悪魔も聖の髪を引っ張り始めた。

『邪魔するな！ こいやらしに悪魔め！』

『そつちこそ！ 聖の大人への階段を邪魔するな！ こむつり
スケベが！』

『誰が、むつりだ！ いいから、その手を離せ！』

『ギャルゲーをやること血脉がむつりだ！ お前にそ手を離せ！』

天使と悪魔が壮絶なる口げんかをしていくと、詩紅母の声がかかつた。

「聖様、こちらを向いてください」

悪魔が天使にニヤリと微笑む。

『ほひ。女の子からのお呼びだぜ？』

天使は顔をしかめ、悔しそうにうぐぐ……とか、うめいた。

『し、仕方ない。彼女が呼んでいるのならば……』

天使が手を離す。

と、そこで一人の会話は途切れた。

現実に引き戻された聖は、びきびきしながらも、ゆっくりと首を回した。

そこには裸体の美少女が……っ……なんてことはなかつた。

それよりも、もつと驚くべき自体がこの狭苦しい6畳間で起つてしまつた。

なんと、詩紅母が消えていたのだ。

「なつ！ き、消えた？？」

こんな、マジカル展開がこの現実に起きていいのだろうか？ しかしもつ起きてしまつたのだから仕方がない。

そんなことより詩紅母だ。彼女はどこに消えたのだろう……辺りをキョロキョロ見回すと、突然詩紅母の慎ましやかなる声が響いた。

「聖様、此処でござりますわ」

此処？ 此処つてどこだよつと、下を向いた瞬間にそれは居た。

なんていうか……蜘蛛が居た。畳の上にひょこひょこと、小さく蜘蛛が乗つっていた。

「蜘蛛……？」

聖が小さな声で呟いた。それと同時に朝の出来事が思い起された。

「そつこいえば……朝に一匹蜘蛛を助けた覚えが……。」

「……」となく、朝の蜘蛛に似てるような……そつじやなによくな……。

と、また詩紅母の声が響いてきた。

「お分かりいただけましたか？」

その大人しい口調に、聖はまさかと思つた。

突然、身体にいよいよのない寒気を覚えた。

聖は、震える口調で、咽から搾り出すよつこ、一語一語区切つて尋ねた。

「ま、まさか……お前は……あの時……助けてやつた……」

詩紅母の声が肯定する声を上げた。

「はい。その時のトロイ蜘蛛にじやれこめす」

その呟るこ声は、やはつこの蜘蛛のほつからした。

サークと聖の身体から血の気が引いた。聖の心に吹雪が吹き荒れた。

その吹雪によつて、聖はものの見事にカチコチに固まつた。

「あ、あの……聖様……？」

詩紅母の困り気味の声が聖の名前を呼んだ。

固まりながら、聖はこんな事を思つたそうな……ああ、助けるのでなかつたと、あの時素直に潰すべきだつたと……。

第一笑～彼女の生態～

蜘蛛……。節足動物門鋏角亜門クモ綱クモ目に属する動物の総称。網を張り、他の虫を取ることで一般的に有名な動物である。

聖は、パソコンで蜘蛛について調べていた。というのも……聖は首を少し後ろに向け、今台所で悠々と夕食を作っている一人の少女を見つめた。

彼女の名前は女郎 詩紅母。

見目麗しく、誰に対しても丁寧な口調で話す、大和撫子な少女である……が、先日衝撃的な出来事があった。

今までこそひして、聖の狭い心を何とか妥協させて一緒に暮らしてはいるものの、実はこの少女何を隠そう驚くべき事に、眞の姿は蜘蛛なのである。

詩紅母は、聖の視線に気がついたのか、ニコリと微笑んだ。

聖はすぐさま、フイッと顔をパソコンのモニターに戻した。

さて、この章ではこの少女がいかにこの根暗で性根が悪く、無愛想で、優しさという感情を持たなく、彼女居ない暦17年のこの聖といつ少年を妥協させたかをお話しよう。

話しあは一日前にさかのぼる。

＊＊＊

～一日前～

「結構だ！ 出でけ！」

「や、そんな事言わないで下をこ…」

詩紅母は泣きながら聖の足に飛びついた。

状況を説明しよう。今詩紅母は聖によつて、外に追つ出されようつとしていた。

「私、今追出されたら行くところ無いのです…」

詩紅母は必死に聖にしがみついている。

「だああつ知るか…！ 離せ、化け物…！」

聖は、必死に詩紅母を追出そうとしている。本当に優しさの「や」の字もない。

「どうして私を嫌うのですか？ 蜘蛛だからですか…？」

詩紅母はうわん、うわん泣きながら聖にすがりつぶ。

「それもあるが…。僕は、今まで通り楽しくゲームやパソコンを一人でやつて過ごしたいんだ！ その生活をお前のありがた迷惑でぶち壊されたくないんだよ…」

自分の自堕落な生活を守るために、いたいけな行く当てもない哀れ

な少女を追出せりとこつのだ。

ほとほと冷酷な人間である。

ああ、かわいそうな詩紅母ちゃん！

「お願ひしますー。なら、聖様のお邪魔をしなことひしますからー。どうから、お側に晒せしてくださー。」

「だから、居るだけで迷惑なんだよー。」

「昨日は止めてくれたではあつませんかー。」

「あれは、お前が蜘蛛の姿で部屋の中を逃げ回ってただけだりつー。」

「ひつやう、昨日もいれと同じ状態になつていたりし。」

昨日は聖が負けたようだ。

「お願ひです聖様ー！ 私を助けてくれたのは貴方だけなんですがーーー。」

「まつへじつこひ」とだよー。」

聖は足を止める。その隙に詩紅母は素早く部屋の中に入った。

「よつひー。」

「あ、あつたねえぞーー。」

聖は怒りにわなわな指を震わせて、詩紅母を指さす。

「汚くなどありません。それに今のは本当の事ですー。」

詩紅母は着物の埃をはたきながら言った。

聖はもうめんどくさくなつて、ドカッと畳の上に偉そつと座つた。

詩紅母も聖の前に楚々と座る。やうして、詩紅母はまた居がかつた口調で勝手に身の上を話しだした。

それと同時に何故か照明がパツと落ちた。

聖はいきなりの事に驚いた。

「な、なんだ？ なんで電気が……」

と、何故かスボットライトみたいな明かりがパツと詩紅母を照らした。

「なんで、うちにスボットライト？」

そんな聖の疑問は無視して、詩紅母の物語は始まつた。

「最初に、私はこの世界の生物ではありません。驚かないで下さい
……なんと……私は……魔界の生物なんですーー！」

「ま、魔界？」

突拍子もない世界が出てきて聖の額からは冷や汗が……。

「そりなんです。あ、でも勘違いしないで下さいね？ 人間さんたちが住むこの世界を征服したり、壊したりするきはありませんので」

詩紅母は手を振り振り、自分がこの世界に無事であることを示す。

「じゃあ、お前は此処に何しに来たんだ？」

聖がそう尋ねると、詩紅母はよくぞ聞いてくれましたとばかりに泣きながら、聖にズズツと近づいた。

「うう……聞いてくださいよ聖様ア～！～！」

「うわア、びっくりした～！ いきなり近づくな！ びっくりするだらうが！」

心臓をバクバクさせ、聖は怒鳴る。おにおい青年。そんなにいつも切れていては長生きできないぞ～。

詩紅母はおよよと着物の裾で泣き始めた。聖の怒りは受け流されたようだ。

「私、本当は魔界で家族と幸せに暮らしていたのです……。ところがつ～！」

聖はウザそうに、「……こちこち大声だすな！ 『近所に迷惑だらうが……』

「近所関係が最悪のお前が何を言ひ……。

「あ、はい。そうですね？ それで、ですね……。ある日私は母親に頼まれて、おばあちゃんのお見舞いに行こうとしていたのですね？」

聖は、お前はゞいの赤頭巾だと突っ込みたかった。そのせいか、身体がふるふると震えている。

ここからは、詩紅母のここにやつてくるまでのこあせつである。

* * *

ここは、魔界では考えられない平和な人蜘蛛族の村。

詩紅母は家の扉から、外へと出た。

にしてもここは本当に魔界か？ といつくらいメルヘンチックな村だ。花とか笑顔で歌つてるし、お菓子の家とかあるし……。

魔界を恐ろしく殺伐としたところだと想像したそこの中！

素直に謝る。『めんなさい。

とにかく、詩紅母は外に出たのだ。

「それじゃあ、お母様、いってきますね？」

詩紅母が花のような笑顔をこれまた詩紅母によく似た優しげ母親に向けた。

「ええ。 気をつけてね？ 寄り道しちゃダメよ。 悪い悪魔が出るからね？」

だから、赤頭巾ちゃんかよーー。

「分かっていますわ」

詩紅母は母親に手を振り振り、何度も何度も振り返り母親に別れを告げた。

そして、リリは森の中。

「リリは、どうでしょ、つー」

詩紅母は森に入つて10分で早速迷つていた。

「困ったなあ……どうでしょ、つー」

詩紅母は辺りをキョロキョロと見回した。しかし、見えてくるのは生い茂る縁ばかり。

このままではおばあ様のお家につけなくなると、詩紅母は涙を浮かべ森を彷徨い始めた。

時折、聞こえてくる鳥達のさえずりで元気付けられながら、詩紅母は森を進む。

しかし、そんなときに詩紅母の身に不幸が降りかかった。

「何かしら……」の音……」

詩紅母の耳に「ガガガ」と呻る嫌な音が響いてきた。そして、次の瞬間！

「えつ！ 何！」

それは、時空の歪だつた。この時空の歪は、この魔界と人間界をぐ唯一の通路だつた。それが突然発生したのだ。

歪は、強い風で辺りの木々や動物たちを吸い込んでいく。

このままでは詩紅母も吸い込まれてしまつ。しかし、時すでに遅し。詩紅母はあつけなく、本当にあけつなく時空の歪に吸い込まれたのだった。

やつして今に至る。

話を終え、詩紅母はまたおいおいと泣き出した。

聖の感想はとこうと、

「……。」

あきれて物も言えなかつた。

「ど、言ひわけで私は色々糺余曲折あつてこつして聖様のお家にたどり着いたのでござります。しかし……この人間界とは酷いところにござりますね？ 私を見ただけで、人間さんたちは私を踏み潰そうとするのですから。そんなんでは、動物愛護協会に訴えられますよ！ それに比べ聖様は私を助けてくださいました！ なんてお優しい！ 本当にありがとうございます！」

詩紅母は深々と頭を下げる。

聖が思うに、それはただ単におまえの小ささに誰も気付かなかつただけでは。まあ、虫が嫌いな人間なら潰しにかかるかもしけんがとか思つっていた。

と、暗かつた部屋が急にパツと明るくなつた。

「どうやら、詩紅母の話しあれで終わりらし！」

「というわけで、お願ひします聖様！ どうか私を聖様のお側に居させて下さいまし！ ただ置いていただければいいのです！」

聖は黙つていた。出来れば面倒ごとにこは巻き込まれたくない……しかし……

聖はちらりと詩紅母を見る。それなりに美人なんだよなこいつ……いや、蜘蛛だけど……こんな美人を見捨てるというのも何か悪い気がする……。珍しく……本当にこんな事何十年に一度あるかないかくらいの奇跡で聖はそう思つた。

「……お前、どうやつたらここからいなくなつてくれるの？」

聖は呟くよう、「しかし、詩紅母に聞こえるよつこたずねた。

えつ？」と詩紅母は怯えた表情で、聖を見つめる。

「や、それは……また時空の歪が見つかれば帰りますけど……」

詩紅母は俯く。

「……本当にその歪とやらが見つかれば僕の家から出て行くのだな？」

詩紅母の顔が驚きにパツと上がった。

「や、それでは……」

「……勘違いするなよ？ 僕はただ、元の生活に戻るために……が
つ！」

「あ、ありがとう」「やれこます…… 聖様……！」

最後まで言い切らないうちに詩紅母が聖に抱きついた。

「な、おい！ ちょっと……人の話しあは最後まで……」

「ありがとうござこます！ ありがとうござこます！ 詩紅母は聖
様のために一生懸命お仕えしますわ！」

「な、ちよ……苦し……」

聖の顔が赤染まる。しかし……照れながら、心のそこでやつぱり追出すかとか真剣に思いながらも、聖の表情は誰も見たことがない穏やかな顔つきになつていた。まあ、たまには面倒ごとに巻き込まれてやつてもいいかな。と、聖はこの天然お惚け蜘蛛少女を見てそう思った。

＊＊＊

そもそもこの考えが間違いだつた。どうして自分はこの蜘蛛女になんて情を見せてしまつたのだろうか？ 今でも不思議で仕方ない。

聖はパソコンをいじりながらそんな事を考えていた。

「聖様～お夕食ができましたよ～」

詩紅母がやんわりとした口調で、聖に呼びかける。

「まともなもん作つたんだうつなあ？」

聖が冷たい口調で、パソコンから視線を一旦外して、テーブルの上に並べられた料理を眺めた。

聖の目に映つたのは、質素ながら見た目で美味しそうだとわかる御袋の味的な和風料理が並べられていた。一瞬にして聖はその料理に圧倒され、じくじくと喉を鳴らした。幻覚か？ 食材がキラキラして見える。

詩紅母は頭に巻いていた三角巾を外し、はにかみながら聖に告げる。

「「めんなさい。食材が少なかつたもので……こんな質素なお夕食

になってしまったのですが……。聖様のお口に合ひつかないか……」

とつあえず聖はテーブルの前に座る。ちりつと詩紅母を見やる。

詩紅母は「――」ながら……

「聖様、どうぞ召し上がってくださいな」

聖が食べることを促していく。

聖は箸を右手に持つて、恐る恐る料理に手をつけ始めた。

やつしり、口に運ぶ。何回か咀嚼する。

聖の箸が一瞬止まる……

「あ、あの聖様……？　どうしたのですか？　ま、不味かったです
か？」

詩紅母が心配そうに聖の顔を覗く。

聖は視線を少し上げて、詩紅母の顔を見つめ返して……

「……美味い……」

小さく、本当に聞こえるか聞こえないかくらいの声で呟いた。

詩紅母はえつと聞き返す。

聞き返されて、聖は顔を赤くした。

「な、なんでもない！」

誤魔化すように、聖はがつがつと詩紅母の料理を口に運んでいった。

不思議そうに首を傾げた詩紅母だが、聖が自分が作った料理を次々に平らげていく様をみて、ホッと胸を撫で下ろしつつも、微笑ましげにその様子を眺めていた。

「おーーー。」

「は、はい！ なんですか？」

ずいっと聖は「」飯茶碗を詩紅母へと差し出した。

「おかわり……」

顔を赤くしながら聖は小さく呟いた。

そんな聖に驚きながらも詩紅母は笑顔で茶碗を受け取り、

「はい。聖様」

せつせつと茶碗に「」飯をよそつた。

こうして、一人の平和で微笑ましい夜は過ぎていったのである。

第四笑～彼女の日常、彼の非日常～

「いいか？ ゼツツッたい！！ この部屋から出るなよ？ 僕が帰つてくるまでだ！ いいな、絶対だぞ！」

「はいはい、わかっていますわ聖様」

詩紅母は聖の罵声を二コ二コしながら聞き流した。さすがに一週間も一緒に暮らしていっては扱いも手馴れてきたものである。

聖は言葉を詰まらせ、すぐに詩紅母から田を逸らす。

「と、とにかく……大人しく留守番してろよ、くれぐれも……いか？くれぐれも……」

おかしなことはするなよと言いかけよとして、「はいはい聖様。何もいたしませんよ。あ、これお弁当です」

二コ二コと受け流す。

聖はまたも言葉を失つて……言い返せなくなつたのか、聖は弁当を詩紅母の手から奪い取つて扉を乱暴に閉めて学校へとイライラしつつ向つた。

「こつてらつしゃいませえ～聖様～

もつすでに見えなくなつた聖に明るい笑顔で手を振る詩紅母。

「さて、聖様が帰つてくる間にお掃除を済ませなくちゃ…」

詩紅母は早速、聖との『何もするな!』との命令を破り始めた。

意気揚々と押入れに無造作に仕舞い込んだある埃を被つて掃除機を取り出した。

「聖様つたら、お部屋のお片づけをしないのですから……ふふふ。仕方のない方ですわ」

とか何とか言いながら、詩紅母は鼻歌交じりに掃除機のスイッチをオンにした。

数時間後……。時間的にはもう廻になつていた。

粗方部屋が綺麗になると、詩紅母は次にいらなくなつた新聞紙や、雑誌などを纏め始めた。

しかし、あの豚小屋のよつた聖の部屋を此処までよく片付けたものだ。感心してしまつ。

と、詩紅母がその纏めた物を家の外に出で立つたときだつた。

「あら? いんなどこにまだ本が……」

何故かベットの下に本の角が少し顔を覗かせていた。詩紅母は不思議に思いながら、その本を手に取つた。

それを手にした瞬間、詩紅母は顔をカツと真つ赤にさせた。

せつしで、何を思ったのベットのシーツがベランとカーテンのよつに垂れ下がつてゐる部分を無造作にじまつとめくつた。

……そこには……

その時は同じくしり、エリは聖の通つ学校である。

「ひ、聖が……べ、ベベベベ弁当持つてきつた……」

お昼休みの時間。渚が聖の弁当に悲鳴に似た大声を上げていた。

「へ、ひぬわいな……べ、別にいいだろー。僕が……その……たまに弁当……持つてきたつて……」

「や、それもそつただけど。で、でも聖はいつも「ンンビニが、購買でお昼を買つてる人なのに。しかも、確か聖は極度の料理音痴……どうやつてお弁当作つたの?」

む、痛いところをついてくるな、幼馴染とは恐ひしへも、面倒な存在だなと聖はそう思った。

さあ、言い訳が難しくなつてきた。どうするか……できるだけ、あの女の存在は知られたくない。

「ど、どうだつていいだろー。あ、あつち行けよー。」

そうだ、渚をいつものように遠ざけてしまえばいいではないか。そ

れで、弁当をかき込んで……

しかし、今日の渚は一味違かった……。

「いやー、聖のお弁当みてみたい。こんな事初めてだもん」
どうやら、聖が持ってきたお弁当の中身が粗野になるのか、渚は断固として聖の机の前から離れなかつた。

「な、なんだよー。」

聖は焦る。まあ……そのままでは、弁当をあけることが出来ない……。

ん？ せつか！ 聖はあることに気がついた。

(わ)だよ。弁当食わなきゃここんだ！ よし、そうしよう(ひ)

聖は、やうげなく弁当を鞄にしまいこんだ。

しかし、渚はすぐにその不自然な行動を察知したのか、聖からまだ包みを開いていない弁当箱を奪い取つた。

「な、何しやがるー。」

聖が食つて掛かる。

「ねえ、聖。何か隠してない

ぞきつと聖は顔を強張らせた。そうして、小さな声で……

「し、してねえよ……」

「本當にっ。」

ズイッと顔を近づける渚。聖は、つしつと顔をしかめる。

「……ほ、本當だよ……」

顔を背けながら囁つ囁つ。

渚は納得できない様子だった。

「じゃあ……そういうなら、このお弁当あたしみてよ……」

「え？ いや……それは……」

「出来ないの？」

渚には珍しく物凄い剣幕だ。

聖はそんな渚に圧倒され、仕方なく……渚から弁当を受け取り、結び田を外す。

（へん……手が震える……ただ、蓋を開けるだけだとこのこと……）

いつまで経っても蓋をあけない聖に憐れを切らしたのか、渚は告げた。

「むつ！ 何してるのよ、もう私があけてあげるー。」

聖はあつと、田を見開いた。

世界がスロー・モーションになつた。何秒かして。

パカッと……運命の扉が開いた……。

開かれたその弁当は、一人が驚愕する内容だった……

その中身はとこうと……まず田に入つたのは、『ご飯の上に桜澱粉で描かれたハートの上の海苔で切り張りされたメッセージ……『愛する聖様へ』だつた……。

そうじて、まるでそのメッセージを飾るかのよつた可愛らじい色とりどりのおかず……。

それは誰がどうみても……愛妻弁当だつた……。

その瞬間、聖の世界は……氷点下零度の極寒の地になつていた。

渚が、笑顔を引きつらせながら冷え切つた声で、にいつ呴いた。

「聖……これはどうこう事……？」

もはや、言い訳ができない。

それでも聖は最後の足掻きと、言い訳を並べる。

「いや、これは……そ、そつ。は、母親が作つたんだよー。」

「……嘘だね……。聖のママはお仕事が忙しくて、聖に余つ暇がないもん。それに、聖は今一人暮らしでしょー。」

「ぐつ……」

聖は確信をつかれ、言葉を失った。

と、そこに騒ぎを聞きつけてか、加賀屋が面白そつなことになつてるとでも言つたげな表情で聖達のところにやつってきた。

「ぐつした、ぐつした？ 聖が押され氣味とは明日は吹雪か、大嵐か？」

そんなわけの分からぬことをほざきつつ加賀屋は、聖の机の上をみた。

そうして、一瞬言葉を失い、

「な、なんじやこりやあああああああああつ……」

数秒の大絶叫を発した。

その場にいた全員が耳を押さえるほどの大絶叫。少し離れた人間が、耳を塞ぐほどだ。側に居た聖や渚にはたまらないだろつ。

渚なんて、クルクル皿を回している。

キーンと耳鳴りがして、クワンクワンと加賀屋の声が頭を駆け回る中、聖はなんとか言葉を発した。

「……な、なんだよ……耳元ででつかい声を発するな……。身体にも心にも悪いだろつが……」

そんな事お構い無しに、加賀屋は聖を席から立たせる。

「ちよっと、」じつに來い……」

「な、なんだ……離せつー 馬鹿野郎つー！」

加賀屋はズルズルと無理矢理聖を廊下へと引っ立てた。

「なんなんだよお前はつー！」

そんな聖の言葉など意に介さず、加賀屋は聖の肩をガシツ強く掴んだ。

聖は少し動搖しながらも、「……何だよ……」と、小さく呟いた。

「……聖……あれば、なんだ？」

「何つて……べ、弁当だよ……」

「そんなもんはみればわかる！ 問題はあの弁当に書かれているメツセージだ！ 聖、あれば誰が作ったんだ？ 正直に答える……」

ようやくいつもの調子を取り戻したのか、聖は離せと無理矢理加賀屋を引き剥がし答えた。

「お前に関係ないだるーー どいつもこいつも……」

「聖……」

珍しく真剣な表情で、加賀屋は聖を見つめた……。やうして、一言

……。

「おめでとうー。」

「まつ?」

いきなり加賀屋は聖にまつ告げた。一体何がおめでとうなのだらうか……。

意味が分からないと驚いた表情を加賀屋に示すと、加賀屋はニンマリ笑つた。

「いやあー。お前にもとつとつ彼女が出来たかあー」

「はー……?」

びつから加賀屋はあれを本当に愛情弁当だと思い込んだらしい。

「で、こいつの間に出来たんだ? 相手は誰だ? まあ、あの様子じやあ、渚ちゃんはないな……誰なんだよ? 隠ぐすに教えろよ」

聖はハア……と溜息を吐いた。

やつしり、一皿……

「お前……馬鹿だらう……」

そうして、聖はけだるげに教室に戻った。加賀屋は、待てよと聖の後を追いかける。

自分の席に戻ると、渚は今の今まで放心していたらしく、聖の姿を見てハツと我に返つた。

聖は、仮・愛情弁当を見つめ、そうしてハアと溜息を吐いて、箸を鞄から取り出し、一口ごく飯を口に持っていた。

今だに、渚と加賀屋が問い合わせてきていたが、聖が「うるさい……」と冷たく言い放つと、その剣幕に負けてか二人は黙り込んだ。

相変わらず、この弁当の主の料理は美味しかった。

聖は帰つたらまず即文句を言つてやるつと仮・愛情弁当をかきこんだ。

そんな、聖の様子を誰が不思議に思わないだろつか……。

渚と加賀屋はお互いの顔を見つめた。

* * *

さて、所変わつてここはオンボロアパートの『305』号室。つまり聖の部屋である。

「そ、そんな……聖様が……こんな、こんな破廉恥なものを……」

詩紅母は手に持つた雑誌を握り、赤面し、固まつていた。

今詩紅母が覗いている雑誌は、明らかに……×××な雑誌だった。健全な男性諸君にはこれだけで理解できたであろう。もうこれ以上は説明の仕様がないので、あまりこの件に関しては突っ込まないよ

う。

と、突然詩紅母がテーブルの上にのっかでいるビニール製の紐を半ば、無造作に掴んだ。

そして、ベットの下を覗く。やはり、暗いながらも何十冊かの雑誌が確認できた。

詩紅母は手を伸ばし、ベットに隠してある雑誌を全て光の当たるとじろくと掲出した。

その何十冊かの雑誌を束にして重ね、詩紅母はビニールの紐をそれを括れるくらいの長さにきつた。

そして、重ねてある雑誌を新聞紙を括る要領で結んでいった。

他の本の束にも同じことをしていく。

そして、その雑誌の束を外に出してある古新聞や雑誌のとなりにおいた。

そして、パツパと手を払って、部屋に戻った。

その数分後……。

家に帰ってきた聖は驚愕した。

「な、なんだこれは……！　どうなってる！　何故ここに僕の夜のお、

おかげ……」

綺麗に『』みとして出でられて『』いる、『夜のおかず』をみて聖は叫び、赤面する。

「くそ！ きっと、あの蜘蛛女の仕業だな……大人しくしてろと言つたのに……ああー、しかも、保管してあつた雑誌まで……あ、あの女……つー！」

聖の怒りはとうとう頂点に達した。マボロシか、聖の体が燃えてい る。

聖は、乱暴にドアを開き、入るなりきなり怒鳴りつけた。

「おいー！」

「あ、聖様。お帰りなさいませ」

相変わらず詩紅母は動じず、一コ一コと笑顔だつた。

「これ、どういう事だよ！ 何勝手なことしてるんだ！ 僕は大人 しくしていろと言つたはずだぞ！」

詩紅母は小首をかしげる。

「へ？ 私は何もしていませんわ？ 聖様がおつしゃつたように、お部屋で大人しく過ぐしていましたが……」

「じゃあ、これはなんだ！」

聖は手に持っていた雑誌を、さながら水戸 門の印籠のよひに詩紅母へと突き出した。

詩紅母はああっと感嘆の声をあげ答えた。

「今日お部屋のお掃除をしたんですね。それで、その雑誌などがお部屋のお邪魔をしていたので、片付けたのですよ。どうですか？ 綺麗になつたでしょ？」

詩紅母はのんびりとした口調でしゃべった。

その瞬間、聖の中で何かがプチリと切れた……

「な、何が綺麗になつただ……ふざけるなよ……。僕のオアシスをことじ」とく壊しやがつて……。お前何様のつもりだ！ 勝手なことするなー！」

「あ……。も、申し訳ありません……」

詩紅母はうなだれた。

しかし、それでも聖の怒りは止まらない。

「それから、なんだあの弁当はー、おかげで周りの連中に誤解されただろひー。」

「あ、あの……感謝の気持ちを込めたつもりだったのですが……まあ味がつたですか？」

「その感謝が迷惑なんだ！」

聖は詩紅母に鋭く、冷たく言い放つた……。

詩紅母の瞳に涙がわいた。

「わ、私は……聖様に喜んでいただこうと思つて……」

そうして、聖はとうとうドメを刺す言葉を詩紅母に投げかけた。

「それが迷惑だつて言つてるんだよー。」

その言葉は詩紅母の胸の深い部分に刺さつた……。気がつくと、詩紅母の瞳からは大粒の涙が流れていた。

聖もさすがに、しまつたと口を押さえたがもつ遅かった。

と、詩紅母が無言でエプロンと三角巾を外した。

「いのんなさい……聖様……」

聖は何も答えられなかつた。

その日、一人はずつと黙つていた。

さすがに、あの後では氣まずいのであらう。

夕食も、寝る時ですら詩紅母は何もいわなかつた。

聖は何故か違和感を覚えた。この天然すつとぼけ蜘蛛少女が静かになつて、自分の生活が元に戻り始めているといふのに聖は落ちつかなかつた。

自分はどうしたのであらう。どうしてこんなに後ろ髪を引かれているのだろうか。

わからない。

青年は気がついていなかつた。

詩紅母を×××になつてることを……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150d/>

スパイシー・スパイダー

2011年1月13日03時11分発行